

〈総合A〉

問いそして追求する人間になろう

横山 紘一

哲学と仏教

早いもので立教で教鞭をとってから二十年が過ぎました。三年前に全学共通カリキュラムが発足するまでは、一般教育部で哲学を担当してきましたが、哲学といっても私の専門がインド哲学とりわけ仏教ですので、仏教思想を中心に哲学を講じてきました。

まずこの「哲学」という語に対する私の考えを述べさせてもらいます。この語は周知のようにギリシャ語の *philosophia* (フィロソヒア) の訳語であり、元来は「希哲」と訳され、それに学が付加されて希哲学となり、最初の希が省略されて哲学となったといういきさつがあります。しかし私はこの哲学という表現があまり好きではありません。なぜならフィロソヒアは決して社会学、法学、自然科学、経済学といった「学」ではなく、その原語の原意からして「智を愛する」という人間の生の営みであるからです。その事情は「仏教」についても同じです。明治以後 *religion* という語が入ってきて、それに対して宗教という訳がつけられ、他のキリスト教、イスラム教

などと対比されて仏教という表現が作られたのですが、仏教はけっして「仏の教え」だけを意味していません。それは、仏陀すなわち覚者になるために実践をして最終的には悟りすなわち智慧を獲得するに至るまでの、やはりフィロソヒアと同じく、人間の生の営みなのです。このように哲学と仏教とは基本的には類似点を有する思想体系であるという確信を深め、最近では、もちろん両者の相違点を考慮しながらも、両者の共通点を探る授業を展開しています。

学問とは

本年度の総合Aの授業として私は次の三つを担当しました。

哲学思想演習「唯識思想に学ぶ」

思索の方法「インド人の考え方に学ぶ」

現代思想状況「十牛図に学ぶ」

すべての副題に「学ぶ」という表現を付けました。これには理由があるのですが、それに関してまず私なりの学問論と教育論とを述べさせていただきます。

学問とは「問いを学ぶ」ことである、

あるいは「学んで問い、問いで学ぶ」ことであると定義をしたい。ところで、はたして現代の若者たちは高校までの教育過程のなかで問う能力を身に付けてきたでしょうか。たしかに人間である以上、「なに、なぜ、いかに」と問う根源的な探求心は先天的に具わっています。でも現代の日本社会を毒している学歴偏重、受験競争、管理教育などによって、若者たちはその探求心を十全に発揮できない状況に陥っているのです。彼らは問う心を抑圧されると同時に、「なにを問うべきか」という問いの対象をも見失っているといえるでしょう。

このような現状を踏まえて、私は学問の目的と教育の基本的理念とを次のように一応定義してみました。

(学問の目的)

なに、なぜ、いかにという問いに対して自ら納得できる知識を追い求め、同時にその知識を具体的行動のなかで生かすことができるような事実のなかで自分を鍛えること。

(教育の基本的理念)

- ①学ぶ側に、なに、なぜ、いかにという人間に具わる先天的な問いを喚起せしめる。
- ②それによって自己と他者(人間・生物・自然・宇宙)へ強い関心を抱かしめる。
- ③もって人間いかに生きるかという根源的問いへの解決を目指して情熱的に生きようとする意志を養成する。

問答形式の授業

いささか大上段にふりかぶった表現になりましたが、とにかくすべての授業における私の基本的姿勢は、学生のなかにある「問おうとする先天的な意志」を引き出そうとすることにあります。その最適な方法が、あのソクラテス流の問答です。このような観点から、前記三つの授業のうち、そのような問答形式をとっている哲学思想演習「唯識思想に学ぶ」の授業でどのような問答を展開しているのか、その一端を項目別に紹介してみましょう。

①真の自己を追求しよう。

まず最初の授業で「<自分のもの>といえるものを挙げてみて下さい」というと、学生たちは「自分の時計、自分の服、自分の父母、自分の友人」など身の回りのものから始まって、そのうち眼を自分に向け「自分の身体」を挙げてきます。そこで私は「時計、服、父母、友人、身体といったものは感覚のデーターとしてはっきりと認識できるが、そのようなものに所有格で結びつく<自分>という言葉に対応するのはなにか」と問いますと、学生たちは、はたと困ってしまいます。なかには「この身体が自分である」と答える学生がいます。「自分は身体である」というのです。そこで私は「そこにあるのは身体だけであって、なぜ君はそれを<自分>あるいは<自分の身体>と考えてしまうのか」とさらに問いを深めていきます。このような問答を通

して学生たちは「自分という〈言葉〉だけが、あるいは〈思い〉だけがあるのかもしれない」という疑問が起り始めてきます。そこで私は「指は他を指すことはできるが指自身を指すことができないように、私たちも他を知ることにはできるが知りつつある自分を決して知ることはできない」と譬えを用いながらさらに問い掛けていきます。そして「自分自分と思ひ込み、しかも言葉で捉えた自分はあくまで対象化された自分であり、それは本当の自分の千分の一の、否、一万分、一億分の一の、とるに足らない、執着すべきではない自分ではないか」と問題提起するのです。

以上の問答を通して、学生たちは、自分という事柄に関してだけでなく、すべてについて「認識するがごとくには、ものは存在するのではない」という事実が気が付くようになります。その自覚が「よし、では真の自己とはなにか、なにが本当に存在するのかを追求しよう」という気持ちを若者たちの中に引き起こすようになるのです。

②言葉通りに物事があるのか。

次に私が試みる問答は、チョークを指し示しながら「これはなにか」と問います。すると学生は当然「それはチョークである」と答えます。そこで私は「それは正確な答えではない」と繰り返して反問しますが、答えた学生は最初は首を傾げます。しかし私が「誰が?」と言った途端に学生は「〈それはチョークである〉と私が考えます」

とやっと私が期待した答えが返ってきます。本当に私たちは「私が考える、判断する」という事実を忘れて、単純に無反省に「それはチョークである」と判断してしまっているのです。

これに気付いたところで、「もしそのように判断する私が変われば判断内容も変わってくるのではないか」とさらに問題提起をするのです。

問題提起はこれで終わりません。つづいてチョークを左手に持ち、右手でそれを指しながら、「もしもこれに語る能力があれば、〈人間よ、なぜ自分をチョークと呼ぶのか〉と怒るのではないか」と問い掛けます。これに対してもなかなか理解できないようですが、「人間の判断がすべてではないのではないか」と付言することによって、何人かの学生が頷くようになります。

「自分が言葉で語る通りに物事は有る」と思い込んでいる人間の臆見、ドクサを私は以上のような問答で学生に気付かせるのです。

とにかく私は最初の授業で、学生のこれまでの常識や思い込みを一気に打ち破り、頭を真っ白にして「自分は根本的なことについては何一つ知らない」という事実を自覚させるように努力するのです。その自覚こそが、あのソクラテスの「無知の知」であり、無知を知ることによって、若者のなかに「よし、本当に真に有るものは何だろう」と追求する情熱が湧いてくることをその後の何時間の授業の中で彼らの目の輝きが増すことから知ることが

できます。忘れていた幼児時代の、あの「なに、なに」と問う心が再び活動し始めたのです。

ここで副題のなかにある唯識思想について簡単に触れておきます。唯識思想とは、あの小説『西遊記』の主人公で有名な玄奘三蔵が、十八年にも亘る苦難の求法の旅の末に、インドから中国にもたらした大乘仏教で、「一切は唯だ己れの識すなわち心が作り出したものにすぎず、外界には事物は存在しない。自己の心を変革することによって迷いから悟りに至ろう」と主張する思想です。このように唯心論的傾向をもつこの思想は、物質文明の真只中で物に溺れて自己を見失っている若者たちに、探求の対象を外から内に向け変えさせるに絶好の方便的唯心論的思想であります。この思想を通して、自分から外に流散したすべての存在をいったん心の中に還元して、「言葉」と言葉が指し示す「もの」との関係をじっくりと観察してみようではないかと学生に訴えるのです。

③二分法的思考を終焉させよう。

先に唯識思想は方便的唯心論であるといいましたが、それは、唯心論といっても唯だ心のみが有るのか、唯だ物のみが有るのかという二分法的な意味での唯心論ではなく、唯識、唯心といっても識すなわち心は「有るようで無く、無いようで有る」という意味での存在性しかもたないからです。毎回のようには黒板に「有即無、無即有」あるいは「非有非無」という語を書くよう

にしています。それはヨーロッパ的な二分法的思考の限界と弊害とを是正するためです。二分法的思考とは、有と無、自と他、一と異などと言葉でもってAと非Aとに分けて物事を捉える思考方法のことです。もちろんこのような思考は、社会的に世俗的に人々の中で生きていく上では必要ですが、「なにが真か、なにが善か」という根源的な問いを解決しようとする道においては、それだけでは不十分であり、もしもそのような思考にだけたよるならば、そこに迷いと苦しみと、そしてときには罪悪までもが引き起こされることになるのではないかと問題提起をします。

以前にある学生の「考えるとは言葉で考えるのではないのでしょうか」という考えに接して現代人の病をはっきりと知ることができました。そこには「成りきって考える」というより根源的な思考のありようが忘れられているからです。その病を治すべく、私は、「自己の具体的な世界の中で存在に成りきって成りきっているときに<有>と<無>という言葉を出して見ようではないか。そのとき、あたかも熱いフライパンに垂らされた水滴のように、有と無とははじき飛んでしまうのではないのか」と問題提起するのです。

以上のような問題提起を問答形式によって学生はどれだけ理解できたかは分かりませんが、とにかくこれまで思っていた「考える」というありようとは別のありようがあるのだと気付くようになるのではないかと私は期待して

いるのです。

前記した三つの授業のうち、残りの二つは百人以上のクラスですので一方的な講義形式をとっていますが、訴える内容は最初の授業と異なりません。いつも大勢の人数を対象とした授業が問題となりますが、私はそれに対して、なぜ大勢ではいけないのかと疑問に思っております。たしかに一つのテキストを厳密に読むことによって資料の収集とか扱い方、テキストの読み方などを学ぶことも大切ですが、それと同時に最初に述べました「問いを学ぶ」「なにを問うのか」という学問の根源的ありようからすれば、なるべく多くの学生に忘れ去った「問いへの情熱」の回復を訴える授業もあってよいのではないかと考えています。

最後に学生に半期の授業を終えて短い感想を書いてももらったうちの一つを紹介しておきます。

「今自分が成長し様々な性格をもった人達と接している。人と触れ合うなかで、その人に対する印象が段々と固定され、自分なりに「その人」を作り上げてしまう。中には好き嫌いが出来てしまう場合があるのだが、一体自分は何を基準にして人を評価しているのだろうかと考えたとき、答えとしてでてくるのが、「自分の主観」だ。十数年人間をやってきたわけであるが、環境や経験、体験によって知らず知らずのうちに、ある特定のオリジナルな考えを持つようになった。人と話し合うと

必ずどこかで相違があることに気が付き、違和感を覚える。自分の主観が、ある意味でわがままになっているのだ。そもそも個人の主観とはわがままであるのかもしれないが、私はそれを否定したいのである。上にも書いたが、必ず好き嫌いがでてくる。私はその自分勝手なわがままを取り除き、世界中の、大袈裟に言えば全宇宙のものに対して、等しい物差しで接することが出来るようになりたい。対人間関係においては一歩か二歩かきかかって常に全体を見渡せるような人物になりたいのである。

しかしなかなか主観すなわち自己のエゴを払いのけることができないのが現状である。古人は対話することによってドクサを取り除き真なる自己を求めていった。自分にはまだソクラテスやプラトンのように対話の本当の意味がわからない。

この授業で良いことを聞いた。これは初耳だ。「成りきる」ということだ。この意味についてもまだ理解し得ない部分があるが、何か得たものがあるように思える。聖人と呼ばれる人々は一体どういう人たちなのだろうか。自分がエゴを持つにつれて、そう思うようになってきた。

とりあえず今は自分の思ったことを実践していきたい。」

(よこやま こういつ 本学文学部教授)